

# 随想「甘え」が日本を滅ぼす

## どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

### 第35回 世界で初めてデリバティブを 発明した日本人はどこへいった？

#### 1. 日本人はデリバティブのパイオニア

今の金融市場では金融デリバティブが活発に取引されているが、これがスタートしたのは1970年代であり、決して古くはない。だが、このデリバティブ取引の原点は、商品先物取引である。先物取引は現物の取引でなく、将来現物を買う権利、売る権利という権利の取引であるが、現代の高度な金融商品も、実はその原理は同じである。金融デリバティブは商品先物取引が原点なのだ。

あまり知られていないことだが、商品先物は日本が世界で初めて手掛けたものである。日本人がなかなか使いこなせない金融デリバティブは、日本が世界に先駆けて編み出したビジネスモデルが起源なのだ。

日本の先物は1652年、大阪でスタートした。その年の秋に米が豊作になれば値崩れするし、凶作になれば品薄で値が上がる。このリスクを避けるため、春のうちに秋のコメを売り買いつけておく。春に平均的な値段で売っておけば、秋に値下がりしてもマーケットで安くコメを買い付け高く売りぬけることができる。これで値下がりリスクをカバーできるのだ。このような将来に売買する権利をマーケットで取引するのが先物市場だ。

1697年に大阪の米市場が堂

島に移転し、1730年堂島米会所がスタートしたが、ここで本格的な先物市場がスタートした。現物の取引と切り離された純粋に権利だけの取引市場は、ここ堂島で人類史上初めてスタートしたのである。

同じころ、オランダのアントワープ（今はベルギー領）で先物取引がスタートしたともいわれるが、本格的なものは堂島が世界で最初であることは間違いない。このことは、世界中のデリバティブの教科書の多くに書かれている。

先物取引の発想は、人類が何千年も前から行っていた現物取引とは全く異なる極めて独創性の高いものである。このような発想の転換は、商売のレベルが高度でかつ活発でなければ決して生まれない。

日本人は、戦国時代という「サムライ」の時代、今の日本人とは異質の海洋民族の時代があり、日本人は世界に飛び出していった。このことは前々回に述べたが、この勢いを幕藩体制が押しつぶそうとした。が、それにめげずに逞しく生き抜いた商人が世界で初めて本格的な先物取引を産み出したのだ。この時の商人は同時に「サムライ」であり、今の日本人とは全く異なる革新的でたくましい日本人がそこにはいたのだ。

幕藩体制は、身分制によりタテの移動を封じ、人の移動の自由も制限して横の流動性も封じ込め、日本全体を平和であるが変化のな

い閉鎖的な「ムラ」とする支配体制であった。これにより、「ムラ」の原理は、「ムラ」だけでなく武士も商人も支配する原理となった。にもかかわらず、商人たちは、その支配に決してめげなかったのだ。

#### 2. 今の日本人はデリバティブを消化できない

製造業の国際社会での競争は激しい。原材料のわずかの値上がり競争力の減退につながる。それを避けるため、リスクヘッジをして損失をカバーする必要がある。そのリスクヘッジの場が商品先物だ。現代社会では競争に勝つためには先物取引が必須であり、先進国では先物取引が盛んだ。先物の利用度は経済の活力に比例するといつてよい。

当然のことながら中国は極端なほど先物が好きだ。国際社会にデビューしたのは1990年代だが、先物分野ではあつという間に日本を追い越し、そしてはるか先に行ってしまった。金属関係を扱う上海先物取引所や穀物を扱う大連商品取引所は、今や取引高で世界のトップを争っている。

他方、日本はじり貧で取引所自体の存亡が取りざたされている状態だ。商品先物は2003年から2009年までの6年間で世界の取引量は4倍となったが、日本市場はその間4分の1に縮小している。世界との差は開くばかりであり、現に東京工業品取引所は世界

12位に甘んじている(2011年)。さらに金融デリバティブ取引のシェアをみると愕然とする。東証大証を合わせても世界14位であり、世界で2位の韓国の17分の1、4位インドの7分の1である。世界からもアジア諸国からも周回遅れの状況にある。

象徴的なのはコメだ。日本人は、コメ取引でデリバティブの原理を世界で初めて発明した。ところがこのコメの先物は1939年に休止したまま長く存在しなかった。なぜかと言えば、戦争遂行のための統制経済が戦後も食糧制度として残ったからである。食糧制度が廃止されても流通規制は強い。コメの先物が再開したのは2011年7月に至ってだが、その後の取引量はじり貧だ。

現代の日本人はこの様にデリバティブを消化できない。デリバティブの原理を生み出した祖先とは全く異質の精神構造を持っているようだ。

### 3. なぜ今の日本人は先物が嫌いか

明治維新は薩長という外様が主役であったし、その中では下級武士が中心であった。幕藩体制では底辺にいたものが主役に踊り出したのであり、明治維新は壮大な下克上だったのだ。プレイヤーズの年齢も驚きだ。ほとんどが30歳代で明治維新を迎えた。維新の三傑をみれば、大久保利道は38歳、西郷

隆盛は40歳、木戸孝允は35歳だった。伊藤博文も学んだ松下村塾の吉田松陰は大久保と同年同月生であり、今でもフアンの多い坂本竜馬が近江屋で倒れたのはわずか32歳だった。

これはまさに封印された戦国武士と海洋民族のあのエネルギーが爆発したと言つてよい。「サムライの精神」の復活である。明治の元勳は、「サムライの精神」と「商人の原理」で近代国家形成を進めていった。それは個人が輝いた、まさに司馬遼太郎の「坂の上の雲」の世界であった。

だが明治の元勳達は大きな失敗をした。それは自分達の後継者を育てることが出来なかったことである。彼らは自分達が「サムライ」の精神で成功した事を忘れ、大衆を統治する手段として、幕藩体制の原理であった「ムラの論理」を使ってしまったのだ。その方が従順な臣民を作ることが出来、国の運営に望ましいと思つたのである。

その中核となつたのが教育勅語であった。教育勅語教育は厳しく生徒を管理しようとしたが、管理すること自体が生徒の自ら判断する機会を奪うものである。それは大人になるステップを生徒から奪うものであり、「甘え」を温存する教育システムである。教育勅語教育は高度の「あてがいぶち教育」であり、先回りして子供を構いたがる母権型の教育の極致であった。

さらにそこに徴兵制が加わつた。軍事教練は命令絶対の世界であり、究極の「あてがいぶち教育」なので、さらに従順なだけで物を考えない人間を量産してしまつた。

「サムライ」は16才くらいで元服し、親離れして一人前の武士として戦場に出ていった。「甘え」ていてはいつぱんで首を取られたであろう。元服後は親に頼らず、自分の才覚で生きていった。教育勅語教育や徴兵制とは全く逆の世界であった。

明治から大正と、日本は近代国家を目指して走り続け、多くの偉人を生み出した。そして、そのエネルギーは自由民権運動を経て大正デモクラシーとして結実していった。大正15年、つまり大正の最後の年に男子普通選挙、陪審制度が導入された。しかし、近代化はこれが限界だった。昭和に入り日本は急速に劣化を始めた。劣化が始まると崩壊は早い。ひたすら勝ち目のない戦争に自らを追い込み、最後は国を滅ぼしてしまつた。

昭和元年たる1925年は、教育勅語のスタートした1890年から35年後だ。教育勅語人間が社会の中枢を占め、明治人間と入れ替わって国を運営し始めたが、わずか20年で国を滅ぼしたのだ。

戦後教育勅語は廃止された。しかし、教育勅語時代の教育システムはそのまま維持された。先生の板書きするものをひたすら書き写して暗記し、自ら考えることをし

ない「あてがいぶち」教育が、そのまま受け継がれた。教育勅語が「亡霊」の如く残つたと言えよう。生徒は、さらにあてがいぶちの受験勉強をして大学に入り、一斉に就活してサラリーマンになる。その後は年功序列と終身雇用で、「あてがいぶち人生」を全うするのが戦後の日本人の典型であった。

「サムライ」商人が世界で初めて発明したデリバティブも、教育勅語の亡霊の中で育つた今の日本人には持てあますだけのようだ。となれば、停滞する今の日本を活性化する切り札は、日本人自身が「あてがいぶち人間」を卒業し、「サムライ」の精神を復活させ、人生を自分の才覚と責任で切り開くたくましさを取り戻すことが必須であろう。



金子博人  
(かねこひろひと)

金子博人 法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程(商法)終了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会(IFITA)会員。大東文化大学法科大学院、日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員(東京工業品取引所)。日本フライムリアルティ投資法人執行役員。



## 金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。